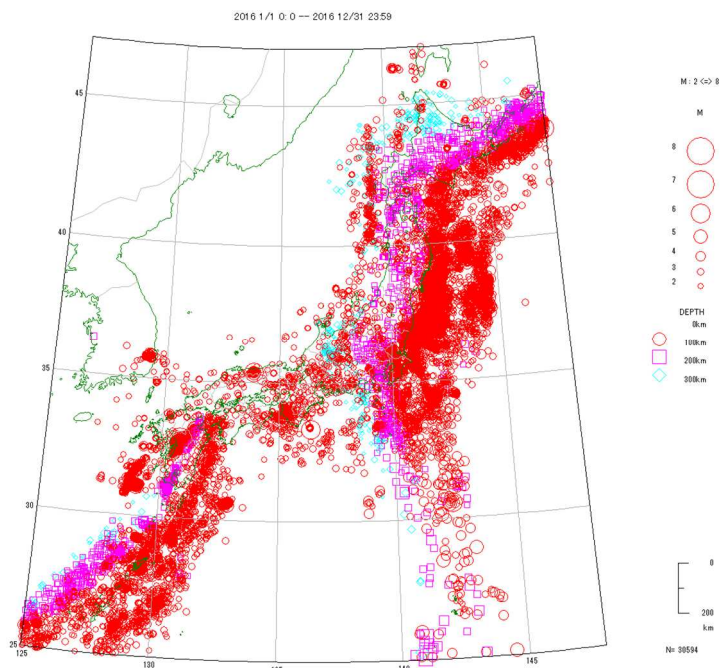


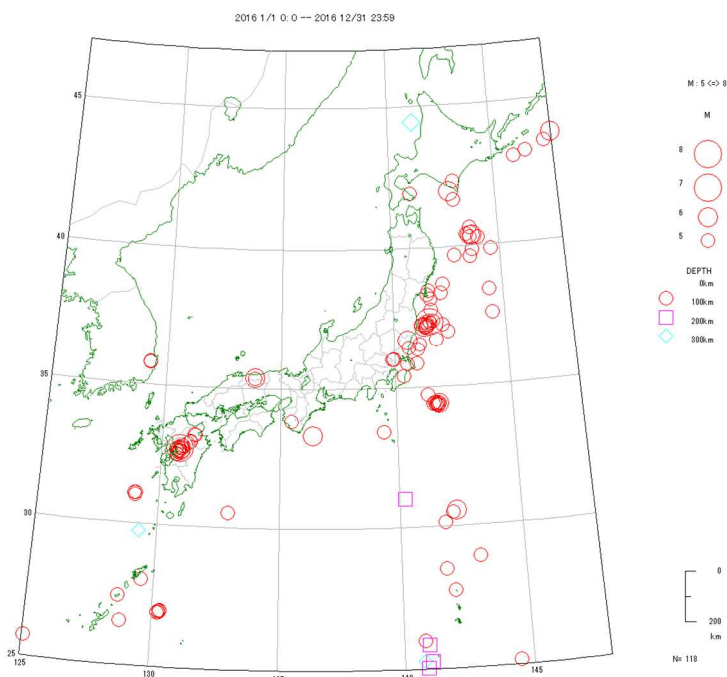


2016年の地震活動総括

下の図は、2016年に発生したマグニチュード2以上の地震をすべて図示しています（深さ300kmまで）。観測した個数は30,594個に上りました。1日あたり85個以上です。マグニチュード0（ゼロ）という微小地震まで数えますと、気象庁は年間20万個以上の地震を観測しているのです！また色の違いは地震発生の深さの違いを表しています。



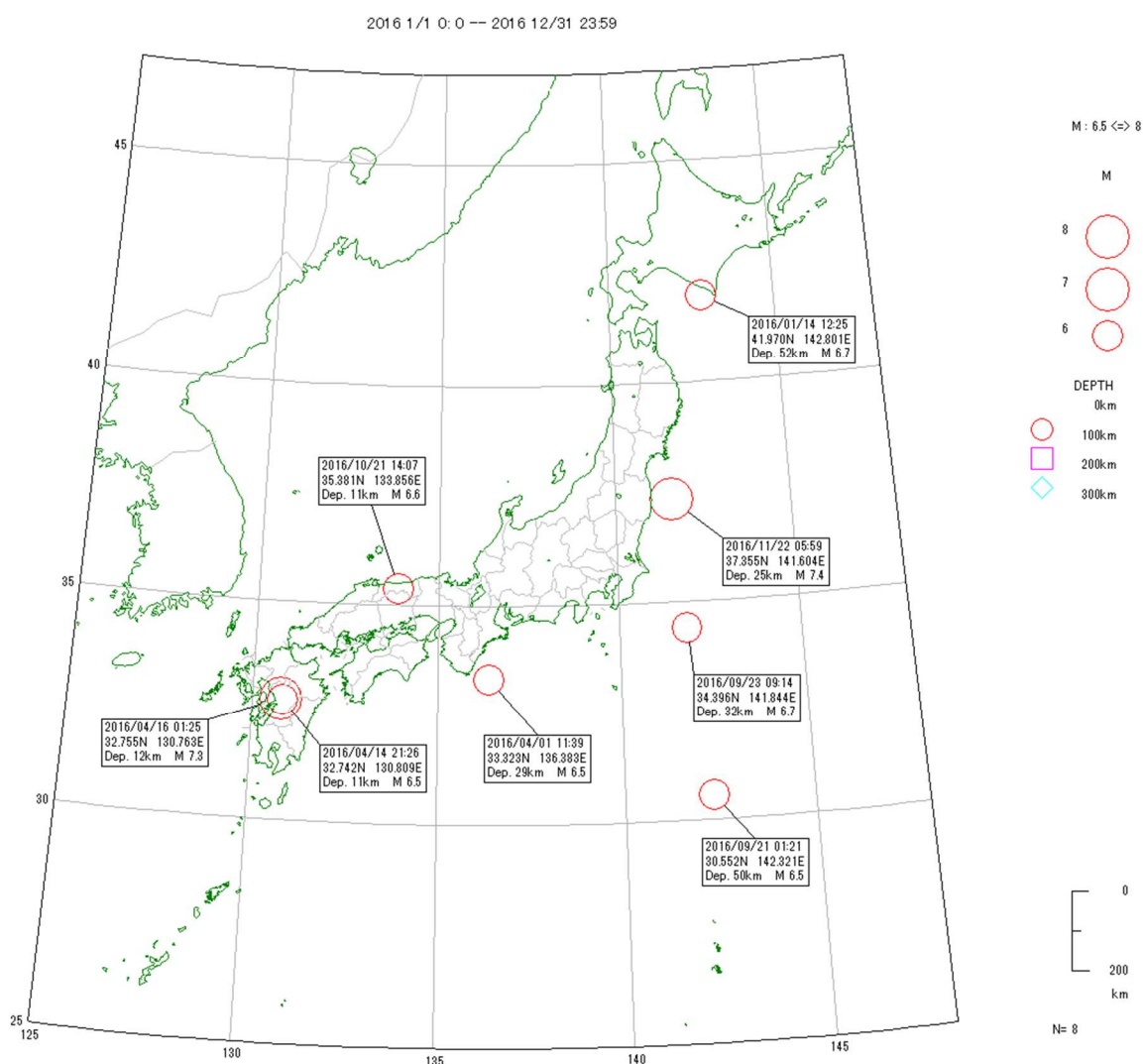
皆様に知って頂きたいのは、地震というのはこのように極めて多く発生しているという事なのです。そしてマグニチュードが1大きくなると、一般的に発生数は1/10ほどになるという性質があります。下の図はマグニチュード5以上の地震を示しています。





マグニチュード5以上の地震は118個でした。つまり3日に1回はこの規模の地震が発生しているのです。

それでは、本当に（被害が出始める）予知（予測）が必要なマグニチュード6.5以上（DuMAが陸域で目指しているのがこの大きさ以上の地震の予測です）の地震は8個発生しました。ちなみに2010年は4個、2011年は37個（東日本大震災の年）、2012年は5個、2013年は2個、2014年は2個、2015年は0個でした。この事からも、2016年は熊本地震を始め、鳥取県中部の地震や11月に福島沖で発生した津波を伴った地震というように、ここ数年ではかなり活発な地震活動があった事がわかります。また紀伊半島の沖合で4月1日にマグニチュード6.5の地震が発生したのですが、この地震は昭和の東南海地震以降、始めてとも言えるプレート境界で発生した規模の大きな地震で、専門家が少なからず肝を冷やした地震でした。



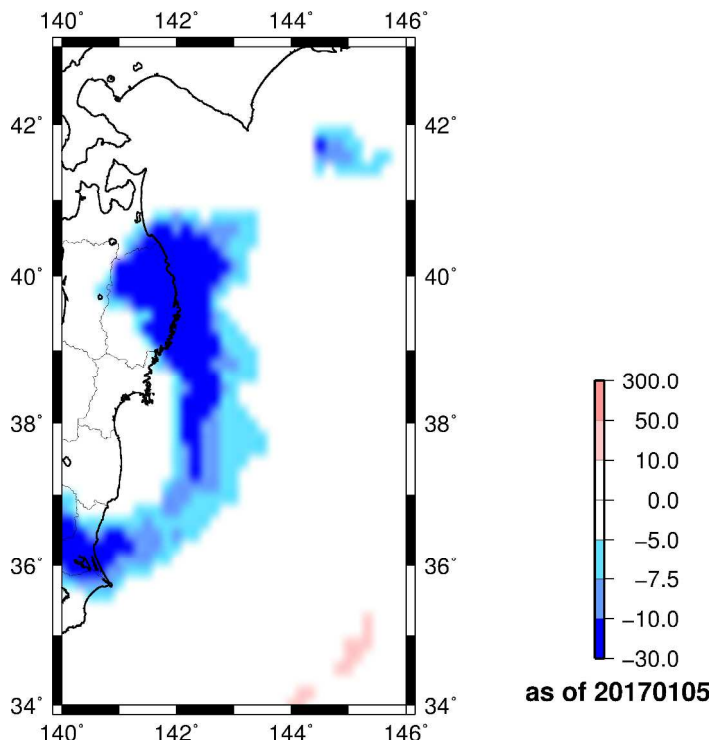
また11月22日の地震は日本列島でよく発生する東西からの圧縮力による逆断層型の地震（東日本大震災も逆断層の地震）ではなく、引っ張りの力で発生する正断層型の地震でした。記憶に新しい12月28日に茨城県北部で発生した地震（M=6.3）も11月22日の地震と同じ正断層型の地震で、これらはすべて東日本大震災が関係しています。次回以降、なぜ正断層型の地震が発生するようになったのかについての解説を行っていきたいと思います。



東北地方沖（沿岸部を含む）の地震活動について

昨年は11月22日に久しぶりに津波を伴う地震が発生し、漁業関係にも被害が生じました。下の図は東北沖にターゲットを絞った最新の1月5日時点の地下天気図®です。

茨城県から岩手県にかけて連続的な領域で地震活動の異常な領域（静穏化領域）が広がっています。特にここ1ヶ月ほどで顕著となってきたのが、岩手県を含む地域での異常です。面積がかなり大きくなっています。このような弧状の異常は昨年から何度も消長を繰り返して出現しています。この異常の領域では、東日本大震災によって、極めて大きな地殻変動があったものを逆に調整するような動きが生じており、11月28日や12月28日の地震のような正断層型の地震が今後岩手周辺や宮城県沖、**関東地方北部**でも発生する可能性が高い事を示唆していると思います。



下の地下天気図は昨年12月1日と7月1日時点のものです。青い部分が静穏化の異常領域ですが、一般に地震は異常の中心ではなく、その周辺部で発生する可能性が高い事がこれまでの経験から知られています。

なお昨年1年間の東北沖に関する[地下天気図のアニメーション](#)をウェブで公開しています。

<http://www.sems-tokaiuniv.jp/aaa/Tohoku-Oki2016.gif>

